

編集顧問

阿部 弘
 岩崎 喜信
 大本 堯史
 河瀬 斌
 菊池 晴彦
 桐野 高明
 佐野 圭司
 高倉 公朋
 田中 隆一
 西本 詮
 橋本 信夫
 早川 徹
 平川 公義
 堀 智勝
 吉田 純
 吉本 高志

編集委員

新井 一
 岡田 芳和
 片山 容一
 齊藤 延人
 佐々木 富男
 高安 正和
 伊達 勲
 富永 悌二
 寶金 清博
 宮本 享
 吉田 一成
 吉峰 俊樹
 若林 俊彦

本号には、私の個人的興味をひく論文が数編掲載されており興味深く拝読した。扉に掲載された「日本発世界へー医療機器の開発」は、渡辺英寿先生の数々の苦勞と、その苦勞が報われた喜びが素直に表現されており、渡辺先生に敬意を表したい。総説「頭部爆傷の特徴」は、大変勉強になった。国際的テロ攻撃のみならず繁華街の飲食店などでの爆発など、私はニュースで見聞きするだけで幸い遭遇することはなかったが、一般的知識は備えておかなければならず、その点で大いに役立った。ピップエレキバンが磁場が圧可変式シャントバルブに与える影響について検討した中嶋浩二先生の論文も興味をひかれた。まず、着眼点とその発想に驚かされた。結論は、圧可変部直上に磁石が位置する場合を除いて、バルブ開放圧設定に影響を及ぼす可能性は極めて低いというもので一安心した。連載「臨床神経心理学入門」第3回の「中毒性疾患と高次脳機能障害」も、曖昧となっている知識の整理に役立つものであった。海外留学記は、東京大学の後輩（サッカー部の後輩でもある）が書いたものであり、元気にやっているのかどうか心配しつつ読ませてもらったが、世界で活躍することを目標に頑張っている様子がうかがえ、安堵するとともにその若さを羨ましく思った。

教授という立場上、論文の査読をしたり、教室員に論文を書くように指導することが多いが、一部の人を除いて、最近の若い人達に於いては論文を書くという情熱が希薄になっているのではないか、論文執筆にあたって真面目さに欠けるのではないか（誤字、脱字、論理の整合性のなさ、引用文献のいいかげんさ、など）と思うことがある。若い人達が教授職に魅力を感じなくなり、専門医だけ取得し、学位はなくても臨床医としてやってゆくのには支障はないと考える風潮が影響しているのではないかと危惧している。1つの論文を書くためには最低数十編の論文を読む必要があり、それによって得られた知識が血となり肉となって成長するのである。教育職を目指さなくとも、論文を真面目に書くことが、実力をつける上で重要であることをもっと自覚してほしいと老婆心ながら願っている。論文を一読しただけで、その人物が本物かどうか容易に推量できるものである。したがって、執筆にあたっては多くの読者から評価が下されるという点も自覚しなければならない。